

壯の卦を踏まえて作詩したものである。「易」は、中国古代の「周」の時代の古いの書物であるが、「易経」とも言われ「四書五経」の一つとして、天地宇宙を明らかにするという哲学書でもある。

さて「大壮」の卦であるが、筮竹で占つて上から「陰陰陽 陽陽陽」の爻が得られたもので、その卦辞は「貞しきに利あり。」であり、占つてこの卦を得れば「吉であるが貞しさを守ることが必要である。」という内容である。ところで「大壮」の卦の九三(下から数えて三番目の陽爻が変爻を示したものは、壮んなうえにもさらに壮んな状態を表しており、その爻辞は「小人は壯を用い、君子は用いることと罔し。貞しけれど厲し。羝羊藩に触れて、其の角を羸ましむ。」とある。その意味は「小人は勝つことのみを求めるからひたすら突進する。君子はこのようなことは無い。たとえ貞しいとしても危うい状態である。例えば羝羊(牡の羊)が暴走して藩(生け垣)に

頭を突っ込み、角をいばらに引つ掛けて困っているようなものである。」という。

なお、「羸」は、からまって難儀すること、この漢字の部首も「羊」である。

さて、冒頭の五言絶句は、その爻辞を踏まえたものである。

起句の「征途」とは、旅路とか人生行路のことで、「人生行路においては、他人に道を譲ることを知ることが必要である。自分が正しいからといって突進すれば、やがて身動きが取れなくなつて苦しむことになる。三步進んで二歩後退すれば上出来と喜び、ほしのままに突き進むことの危険なことをよくよく考えるべきである」という意味の詩である。なお「慢訥」とは、ほしいままにすることである。

明の洪応明の「菜根譚」にも「人情は反復し、世路は崎嶇たり、行きて去らざる処は、須らく一步を退くの方法を知るべし」とある。「人情は移ろいやすく、世渡りの道はきびしい。だか

ら進むのが困難なところでは、一步を退くことを知らなければならぬ。」というのである。

また、「唐書、朱敬則伝」にも、「終身路を譲るも、百歩を枉げず」という語がある。これも「一生涯他人に道を譲つたとしても、その合計は百歩にも満たない。」ということである。

人生、譲ることによって失うものよりも、むしろ見返りとして得るものの方がはるかに大きいこともある。これが世を渡る知恵というのであろう。

さて、「乙未元旦」の詩にちなみ、この一年は車を運転する際にも道を譲るなど、何事も控えめにするよう心がけて過ごしたいと思うのである。



和紙と型絵染版画の魅力



©1996 FUSA SAKAMOTO

前号に引き続き和紙の話に触れていきたい。

外国で絶賛されていると書いたところに、嬉しい朗報があった。和紙の技術がユネスコの無形文化遺産に登録されたのだ。これで多くの人たちが関心を持つてくれることを望むのだが、伝統が引き継がれていくことが大切であり、一度途絶えてしまうと復活はむずかしい。

前号と重複するが、型絵染版画は着物の染色技法を用いて和紙に染め出したもの。和紙と色入れの顔料が融合して、和紙の持つ風合いが独特の魅力となっているのだ。印刷媒体からは感じとることは難しい。

型染めは着物の染色技法の一つで、歴史は古く十六世紀ものが現存しているが、和紙に染め出したのは二十世紀にはいつて和紙の染める版画が開発され、それを作家が全工程通して一人で行い、芸術性の高いものになった。

私は二〇〇三年からウイーンを中心に展覧会をしているが、この国でも好評を博した。ウクライナの文化月間において、首都キエフの美術館で展覧会をしたが、三〇〇〇人の来館者があり、美術館始まって以来だと学芸員はいつていた。

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター)
イラストレーター

春よこい



永岡 慶之助 (作家)

七月の初めに、思いがけない人物が、群馬のわが家に来宅した。福島県白河市の大信村にある『中山義秀記念文学館』の、〇君である。彼は、今年から館長を任されることになり、その挨拶を兼ねて、今年（二〇十四年）は、中山義秀文学賞を創立して第二十回目というので、中山先生を知る人から、話を聞きたいとのこと。

（そうか、義秀先生が亡くなって四十五年か！往年の中山義秀を知る人も、少なくなつたのだなあ……）と感慨深い気持ちになった。

鎌倉仲間だった門馬さんや、松山君、木村さんとは、毎年八月十九日に鎌倉に集まつて、義秀先生のことなど語らっていたのだが、この十年の間に皆、先生と同じところに行つてしまつた。

義秀先生が住んでいた鎌倉の地名から、「極楽寺梁山泊」と呼ばれていた屋敷は、現在、先生が一番下の娘さん家族が暮している。私が、鎌倉にいた頃、借りていた部屋からは、垣根一つ隔てた先生の書齋が、よく見えた。その書齋は、数年前に火災にあい、消失

してしまつたと聞く。あの膨大な本や、資料は、どうなつてしまつたのだろうか、義秀先生を知り、出会つたきっかけは、先生の長男である赤田哲也君と、会津の田舎町で出会つたことだが、二人連れだつて、上京したのは、昭和二十二年の二月、雪の朝だった。鎌倉の義秀先生のお宅に、たどり着いた時から、私の人生は、大きな流れに乗り、哲也君も、また違う人生の流れに乗つた。時に私と近づいたり、ある時には北海道に行き、彼の息子さんが東京の大学に入った時には、しばらく、わが家に滞在したこともあった。（その頃私は、群馬に移り住んでいた。）

北海道を引き払つた後、哲也君は、父君が教師生活の最後を過ごした、千葉県成田市近郊に居を構えた。晩年は、同人誌を発行しながら、奥さんと二人で畑を作つたりしていた。

ある日のこと、六、七年前になるか——突然、息子の清彦の運転する車で、奥さんと三人で、我家に立ち寄つたこ

とがあった。それが、私が哲也君と会った最後だった。昨年、彼も、義秀先生の元へと旅立つて行ったのだ。

義秀先生のことだと思い出すのは、上京したばかりの秋、講演で金沢へ行かれた先生が、悪性の風邪を引かれた時代のことである。薬もままならない時代で、極楽寺の自宅で寝込んでいる先生のために、御家族は、あらゆる方面に、つて伝を求めた。そのとき、朗報あり。

「本郷に居る徳田一穂さんのところに、抗生物質のダイアジンがあるそうだから、永岡君、会社の帰りに寄って、もらってきてくれないか？」と。

退社後に、徳田氏のお宅に寄ると、出て来た夫人が、

「全部飲んでしまつて、無いんですよ、でも、もしかすると、林芙美子さんが持っているかもしれないよ。行かれてみては？」

そこで、新宿へ出て、西武線に乗り、中落合の林邸を目ざすことに。

ちょうど在宅していた林芙美子さんは、心よく薬をくだされたが、

「飲んじゃつて、これしか残っていないのー」と、小さな紙に包まれたダイアジンが、三粒。

このようなことを思い出したのは、義秀記念館のO君が帰られた後、どうにも調子が悪く、熱はないのだが、セキが出て、のどの具合が良くない。夏風邪にやられた気がしたものだから、風邪薬なんぞ飲んで様子を見ていた。しかし、食欲も落ちて来るし、変だ。

二ヶ月に一度、健診してもらっている医者を訪れたところ「肺の音がよくないから、レントゲンを撮ってみましょう。」その結果、肺に白い影が写っており、近くの総合病院に、紹介状を書いてもらい、その足で行ったところ、もつと詳しくCT撮影された。

「すぐに入院して検査を！」と云われたのを、素直に聞けばよかった。抗生物質の薬を処方してもらい、帰って来たのが悪かった。

五日ほどたった朝、起きてきた家人が、布団の上で、ひっくり帰っている私を見つけ、ただちに入院というハメに。

その日の午後、家人が自宅に戻ると、一本の電話。女性の声で、

「もしもし、東京の山本ですが……」

赤田哲也君の妹の玲子さんだった。

よりによって、私が入院したその日に、電話をしてくるとは、玲子さんも驚いたことだろう。

三週間ばかり経った頃、また自宅に電話が。おそろしくの一声。

「先生は、大丈夫ですか!!」

今度は、義秀記念館のO君、玲子さんに聞いて急ぎ電話をしてきたようだ。先月、来宅した時には、元氣そうに見えたのに、と云う。幸い、一週間の点滴による投薬で、肺はキレイになり、体力も取り戻しつつある。

中山義秀文学賞には行けなかったが、春になったら、大信村へ行ってみようと思う。

ツクル



山本千明

(ECC英会話講師)

「七回転んで力尽き」ということにもなりかねない。それでもやる！とことんやる！八回目に起き上がることをひたすら信じて突き進む！「ふえー！すごいなあ」と「感」が「動」して両目が潤んでくる。

だからと言って、ウイスキーの味は正直よく分からない。お酒の席では「強いんでしょ？まあまあもう一杯！」とよく勧められるが慌てて右手でコップに「フタ」をする程「柔な酒好き」人間なのだ。日本酒チビチビ派なので、ウイスキーなど口を含むと、即座に景色が歪み始める。が、そんな私でも、その色と香りには魅せられる。この琥珀色の芳醇な液体は自然の底力と先人達の熱い想いの結晶なのだ。

人はドラマティックな話に集まり、耳を傾け、酔いしれて「ブラボー！」と拍手を送り涙する。「朝ドラ」はここ何年か、そんな「物作人々」にスポットを当て続けてきた。漫画、洋服デザイン、復興、料理、翻訳、そしてウイスキー造り。

NHKの「朝ドラ」が最近やたら面白い。昨年始まった「初の本格的国産ウイスキー」を作る話からも目が離せなくなつた。主題歌担当が、我が青春の歌姫「中島みゆき様」だからという理由だけではなく、「物作り」にかける人々の情熱が、時を越え、空を越え、画面を飛び越えて、胸の奥まで「直球」を投げ込んでくる。

一つの物を生み出すという作業は、まさに陣痛の如し。出産時、あまりの

痛みに耐えかねた妊婦さんが「生むのやめるう！」と叫んで助産師さんにこっぴどく叱られたという話をどこかで聞いたことがあるが（あ、私の体験ではありません）それ程の「生みの苦しみ」を強いられるのが「物作り」。関わった人達（特に中心者）の、努力と忍耐、知恵と根性、が無ければ何も生み出せない世界。しかも、実際に「生まれる」という保証はどこにもない。「七転び八起き」ならまだしも

我が青春の師匠、中島みゆき様（ハイ。私は十八の頃から、みゆきワールドにどっぷり浸つておりました）は高らかに歌われます。

「風の中のすばる」

砂の中の銀河（中略）

地上にある星を

誰もく覚えていない

人はく空ばかりりみくてるく

例えば今、私の手に握られた巨、2Bの鉛筆。滑らかな書き味の黒い芯。それをガチツと包み込む六角形の本と、全体を艶やかに仕上げるコーティング。輝く金色のロゴデザイン。どれ一つとして私が作り出せるものはない。「鉛筆」なる物を考え出した人。それを形にしようと決めた人。原材料を集めた人。加工した人。加工に必要な機械を作った人。そんな機械を作る技術を考えた人、教えた人。その機械の部品の材料を搜した人―そして私の手に渡るまでに運搬した人、店頭と並べた人。運ぶ為の車を製造した人、その部品は…と、たった一本の鉛

筆だが、元を辿ればいったい何百、何千、いや何億の人達が直接的、間接的に関わつてくれているのか想像すらできない。現代社会はそんな「物」たちの集合体である。

「私は誰の世話にもなりません！一人で強く生きていきます！」そんなカッコイイことを言う方がいらっしやったら―にっこり微笑んでスタスタと歩み寄り、両手の人差し指をその方の口に突っ込んで思いつきり左右に引つ張つてこう叫んであげよう。

「どの口が言つとんじゃあ！」と。

今、身の回りの物を見て触れて考えてみよう。自分が一から作り出せるものをがんばつて搜してみよう。

驚くほど「皆無」

恐ろしいほど「ゼロ」

ではないだろうか。

「おんぎゃあ！」と生まれて、産湯につけてもらった瞬間から五十六年もこの長きに渡つて、この「私」という人間はあらゆる自然の恵（光、空気、土や水）と食物（命）と数え切れない

（有形無形の）「物」作る人々のおかげで豊かに生活ができています。

新しい年が明け、日本国内いたる所で人々は「初日の出」に特別な思いを重ねて手を合わせる。しかしながら「お天道さん」の側には「お正月特別サービス」というのは無い。一年三百六十五日、淡々とひたすらに光を発する「お仕事」をしているだけなのだ。

金子みすゞ先生の詩に

すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがつて、みんないい。

というフレーズがあるが、全くその通り。むしろ、「みんなちがつて」いなければ「みんなが困る」のだ。

日本中に、そして世界の隅々に「名も無きマツサン」や、何億もの「地上の星」が居てくれて、それぞれが違った興味、違った発想を持って毎朝毎晩、単々と粛々と「陽光」を送り続けてくれていることに改めて感謝したい。そしてその恩恵に、「透明な液体」で乾杯！

出会いと出会いのご縁

宮本 富夫

(高松大学 名誉教授)



我が家からそんなに遠くない距離に位置する大窪寺へ、時折惹かれるように出かける。思いがけず牡丹や紫陽花の盛りに出合ったり、紅葉の盛りに出合ったりと、季節の推移を知らせる植物の活動の変化、動物の行動に心動かされる。なんとも言えぬ心地よさを味わい、癒しと楽しみをいただく。

一昨年は、ミツバチの分蜂、巣分かれと出合った。夥しい数のミツバチが木々の間を飛び交い、特有の羽音が境内に響く。分蜂では？ そのとおりであった。分蜂を初めて体験した中学時代のできごとを思いだす。授業中、ふ

と気づくと、教室の窓ガラスに蜂がびっしりと群れていた。夥しいその数と特有の羽音に驚きと恐怖、どうなるのだろうか、ある種の不安にかられた。ミツバチの世話をされていた先生が不在の時に、なぜか起こっていたように記憶する。先生のどなたかが、群れを新しい巣箱に誘導し、ミツバチの家族が一つ殖え、一件落着。校庭の一面で飼育されていたミツバチが毎年のように分蜂を繰り返していた。だが、ほぼ自然に近い状況でのミツバチの分蜂に遭遇することは初めて。どこに落ち着くのだろうか。しばし足を止め、

観察する。ミツバチの塊が一本の大木の幹にへばりつくように群れる。塊はみるみるうちに小さくなり、祠の穴が見えてくる。群の塊が吸い込まれるように祠の中に消える。女王蜂が祠を次の棲家と定めたようである。祠の中では、さっそく巣作りが始まっていることだろう。想像しながら、心の中でエールを送る。

このことがあつて以来、大窪寺を訪れると、このミツバチのことが気にかかり、巣の入り口となっている祠の入り口をそれとなく見ることに。ハタラキバチが出入りする様子を見て、ホッとした気持ちに。この夏の参拝時には、探索活動中と思われるスズメバチ一頭が巣の入り口に近づこうとするこゝと出合う。スズメバチは巣への侵入を何度か試みる。そのたびに、入り口付近に警戒する数頭のミツバチが特有のリズムで羽を震わせる。よく知られた防御のための威嚇行動である。眼のあたりにするのは初めて。心の中で『やったー』。映像の世界から知るのみ

であった世界が目の前に展開するという幸運。よき出会いをいただいた。スズメバチはその後、あきらめたのだから、去っていった。『良かった。』スズメバチに対するミツバチの対応を見ながら、十数年前に見た、アシナガバチの対応を思い出す。アシナガバチはスズメバチに対し、まったくの無抵抗であった。食われるまま、巣が破壊されるまま。スズメバチはバリバリと音をたてるような勢いで、遠慮なくアシナガバチを食した。自然界を律する食うものと食われるものとの関係、自然の掟の厳しさを感じたことを思いだす。自然界を律する摂理だから、受け入れられないのだろうか。

結願の寺ということもあるのだろう。いい雰囲気漂わせる素敵な表情のお遍路さんとよく出会う。十数年前になるだろうか、「八十八カ所をめぐり、今奥の院に参拝したところですよ」という青年と出会った。○日近くを歩きつづけたとは思えない元気のよさ、顔と言葉には達成できたことの喜びが

溢れていた。一番札所を経て、高野山へ参拝されるという。この青年の素敵な表情と雰囲気は今もありありと思いつかぶ。いつおまいりしても、心地よい気持ちにさせていただく大窪寺の雰囲気は、お遍路さんがもたらす何かが一役かっているのかもしれない。祈りに込められる人の心なのだろうか。長野の善光寺におまいりした際に感じたものと通じているように思われる。こういったご縁を心が時折求めているということなのかもしれない。大窪寺へは時折むしように心誘われ、参拝することとなる。そして、健やかな気持ちにさせていただく。

先だって、徳島県境から三本松へ向かうつもりが、大窪寺につながる国道R三七七を選んできました年配の方とお会いした。たまたま私たちと一緒に本堂に参拝され、私たちが秘仏薬師如来におまいりする際に何となく一緒にされ、秘仏のおまいりも一緒にという展開となった。この薬師如来は薬壺ではなくホラ貝を持つておられる。珍

しいものであるという。秘仏は四国八十八ヶ所霊場開創一二〇〇年ということで、五十年ぶりに開帳されていた。言葉を変えたと、その方いわく、「三本松へ向かうつもりで車を走らせていたのに、道を取り違えてしまった。気づくと大窪寺の下に。せっかくだからとおまいりさせていただいた。」と。道を取り違え、大窪寺におまいりし、期間と時間が限定されて五十年ぶりに開帳されている秘仏薬師如来におまいりされることに。「導かれたとしかいえないね」と、家内と言葉をかわし、不思議な気持ちにさせられる。本人の顔にはなんともいえない笑みがあるのだから、仏様とのご縁とは不思議なものである。私たちの手には、秘仏拝観に先立ち、身を清めるためにいただいた抹香の何ともいえない甘い香りが残った。「今日一日は手を洗いたくないなあ」と言いつつ、帰路につく。

豊臣秀吉の怒り



池田 一 貴

秀吉は静かに怒りをあらわした。声はあくまでも沈着冷静な響きを伝えているが、手が、指が、小刻みに震えている。こんなときは心底怒っているのである。

「切支丹・伴天連を、わが日本より追放する」
短くそう言うと、右手であごを撫でた。余裕のしぐさを示そうとしたのだろうが、その右手が震えている。

かつて織田信長から「六つめ」と呼ばれたこともある秀吉の右手には、指が六本あった。生まれながらの多指症で、親指の付根にもう一本親指が生えている。ルイス・フロイスや前田利家もその事実を記録していた。チラと一瞥しただけでは気づかぬこともあるが、よく見ると異様、というより一瞬目の錯覚かと思わせるような不思議な印象がある。むろん本人のせいではないが、この時代の人々はそれを前世の業（行い）の結果だと考えていた。つまり自業自得の一例だ。

子供のうちに余計な指を切り落とすのが通例だったが、秀吉の父は変わり者で、

「戦つづきの今の時代、百姓が戦で手柄をたてることもある。手や指は余計にあつたほうが有利だ。一本切られてもまだ五本ある」

との考えから、なんの処置もしなかった。こういうふうには物事を肯定的な方面から見ると、法（現代風にいえばポジティブ思考）を秀吉も受け継いでいたのだろう、六本指を恥じたことはい。と、いつて見せびらかすこともなかった。

右手であごを撫で、結果として、他人の目に二本の親指を見せてしまうのは、もの想いに耽っているか怒り心頭に発しているかのどちらかなのである。

この日は、天正十五年六月十八日（キリスト教暦一五八七年七月二十三日）で、当日十一箇条からなる伴天連追放令の「覚書」が作成されたが、正式には、翌日付で五箇条からなる「伴天連追放令」が發布された。

この追放令はあくまでも「バテレン追放令」であって、「キリシタン禁教令」でないことに注意する必要がある。バテレンとは、ポルトガル語の padre（パードレ、神父）を意味しており、この神父に対する追放令なのである。同じくポルトガル語のキリシタン cristão（クリスタノ、キリスト教徒）に対する追放令でも禁教令でもなかった。つまり、一般人（大名、武士、庶民）の信教の自由は認めるが、外国人神父すなわち宣教師の布教活動は禁止する、ということである。

追放令とはいっても、直ちに国外へ放り出したわけではない。退去までに二十日間の猶予が与えられたし、布教以外の商用の入国、滞在は認められたため、事実上の滞在延長が黙認された。

これまで信長と同様、秀吉はバテレン（神父）を厚遇し、布教を是認してきたが、島津など九州の大名を平定した後、態度を翻した。なぜ秀吉は急にバテレン追放令を出したのか？ なぜ怒ったのか？

二

秀吉の怒りにはおよそ三つの理由があった。第一が神社仏閣に対する破壊行為、第二が肉食の問題、第三が奴隷売買である。

秀吉は前々年の天正十三（一五八五）年七月に関白の位に就き、翌十四年九月に豊臣の姓を賜り、同年十二月には太政大臣に就任し、位人臣を極めた身である。

「もはやわしに指図できる者はどこにもおらぬ。自分は天下人である」という自負があった。

九州の島津や関東の北条のように一部に従わぬ大名が残っていたものの、もはや帰趨は明らか。時の流れは我にあり。

そして今年、天正十五年には島津の総大将・義

久も頭を丸めて降参してきたのである。島津軍が九州一円を制圧する寸前に、秀吉の軍が到着。さしもの島津も関白太政大臣の三十万もの大軍には敵わなかった。

「それにしても」と秀吉は、側近の侍医に語りかけた。「あちこちの神社仏閣の荒廃と惨状は、なんじゃあれは。九州はいつのまにか日本とは違う異国になろうとしているかのようじゃ」

「さようでござりまするな。とりわけキリシタン大名の諸国にそれが目立ちます。その点、まだ島津のほうがマシかと」

「うむ。おぬし、童のころの手習いのお手本は何であったか」

「ご先祖が文章博士の家系ゆえ、最初は論語でござります」

「わしは御成敗式目じゃ。上様（織田信長）にお仕えしていたころも、式目の文章を何百回となく書き写して、漢字と漢文を覚えただものじゃ」

「あ、それはわが家でも必須でした」

「御成敗式目のご精神は、わしの頭にこびりついておる」

その武士の根本法たる御成敗式目の第一条には「神社を修理し、祭祀を専らにすべきこと」とあり、つづく第二条には「寺塔を修造し、仏事等を

勤行すべきこと」とある。神仏を敬い、神社仏閣を大切にすることは、武士に課せられた義務なのである。

であればキリシタン大名が、伝統ある神社仏閣の破壊を容認もしくは使喚するなど、言語道断の仕儀であるといえよう。

ついでに触れておけば、織田信長の比叡山焼き討ちなどは御成敗式目違反もはなはだしい蛮行とみられるかもしれないが、じつは御成敗式目の第二条の最後にはこんな但し書きがある。

「但し恣（ほしいまま）に寺用を貪り（＝私して）、その役を勤めざるの輩においては、早く彼の職を改易せしむべし」と。

信長は第二条の但し書きに基づいて過激な「改易」を実行したとも解釈できるのである。延暦寺に女子を引き入れ、武器を蓄え、女犯と殺生の戒律を破る僧など「改易」されても仕方あるまい。

逆にいえば、信長もまた御成敗式目には従っていたということになる。信長は神社の再建を援助したりもしている。ただの暴れん坊、無法者ではなかったわけである。少なくともキリシタン大名の神社破壊とは意味が違っていた。

日本では武家も庶民も、法を重んじる遵法精神が、西洋よりも早く定着していたといつてよい。

御成敗式目が貞永元年（西暦一二三二年）に制定されたとき、執権の北条泰時以下十三名の評定衆（裁判官）が連署して神仏に誓う「起請文」の形式を採用した。

その宣誓文には、審理の過程において、訴訟人との親疎の関係や好悪の感情に左右されず、同輩に気兼ねせず、訴訟関係者の権力権勢を恐れず、ただ「道理と自己の良心」のみに従って判決（のための意見）を述べねばならない、とされていた。すでに近代法の精神が存在したのである。

ちなみに原文は漢文で、この部分はこう書かれている。「凡評定之間、於理非者不可有親疎、不可有好悪、只道理之所推、心中之存知、不憚傍輩、不恐権門、可出詞也」と。これを読み下し文にするとこうなる。「凡そ評定の間、是非においては親疎あるべからず、好悪あるべからず。ただ道理の推す所、心中の存知、傍輩を憚らず、権門を恐れず、詞を出すべきなり」。

ここにいう「道理の推す所」とはすなわち客観的な妥当性（道理）であり、「心中之存知」とは主観的な真理（良心・理性）である。その二つが統一された詞（判決）となって表出されねばならないという、何人も否定し得ない大命題がここに宣言されている。

秀吉の頭には、この「御成敗式目のご精神」がこびりついていたのである。

三

国民が法に従うためには、裁きを下す裁判官が公正でなければならない。その公正さを担保するものは、道理と良心である。コネや権力を排した、道理と良心による審判。こうした近代的な司法判断の独立という原則が、十三世紀初頭の日本で確立されたのは驚異的なことである。このときから日本は近代化への道を歩み始めたといっても過言ではない。御成敗式目はその象徴だった。

この起請文を含む御成敗式目の文章は、それ自体が神聖化され崇拜された（例えば仏像の胎内に写本が奉納された）ことに加え、後世の江戸時代には寺子屋で子供らの手習いの手本とまでされた。だから御成敗式目を書写した写本古文書は驚くほど多い。いかに日本人がこの法の精神を誇りに思っていたかがわかるだろう。

「わしは今でも誦んずることができるぞ」

秀吉は御成敗式目の全五十一条を暗記していた。天下に号令する者なら法のなんたるかを掌握しておかねばならぬ。

この式目は、聖徳太子の十七条憲法の精神を暗

黙の前提としている。五十一という数字には十七を天地人の三才に展開したという意味が込められている。武士の根本法典は朝廷の根本法典と繋がっていたのである。

その意味で、ポルトガルから来たバテレンは、日本のキリシタン大名や一般信者をそそのかして神社仏閣を破壊し、聖なる法の精神を踏みにじったのである。

秀吉の怒りの第二の理由は、バテレンが牛馬を食べることであった。この食習慣に対する違和感、肉食に対する嫌悪感は、理屈を超えていた。

農作業においても戦においても、人間の友ともいうべき親愛なる動物を、心の痛みもなく食べてしまう南蛮人のおぞましい食習慣が許せなかった。そんな悪食が日本を侵食することに耐えられなかったのである。

第三の理由、そしてこれが最大の理由なのだが、バテレンがキリシタン大名と手を組んで、多数の日本人を奴隷として外国に売り飛ばしていたことである。秀吉の手を震わせるほどの、怒りの主たる原因はこれだった。九州征伐をした結果、その現実を知ったのだった。

それにしても、耶蘇教（キリスト教）とは、なんと人倫に悖る宗教であろうか、と秀吉はいぶ

かった。

四
バテレン追放令——。

この決断は南蛮諸国（ポルトガル、イスパニア、スペイン）を敵にまわすもので、場合によっては南蛮との戦を余儀なくされるかもしれない。だが、日本全体に責任をもつべき天下人なら、断固として決断しなければならぬ国策であった。

また当時、日本が鉄砲大国であることは宣教師らの報告によってヨーロッパにも伝わっていた。日本の保有する鉄砲は総数五十万丁以上で、世界の鉄砲の半数を占めるともいう。それはバテレン追放令を支える自信の源でもあった。

「たとえ百姓であろうが乞食であろうが、日本人に奴隷は一人もいない。日本人は自由である。」

もともと百姓の生まれであった自分が、このように天下人になれたのも、日本が自由の国だったからだ。奴隷制が存在する国は自由ではない。日本は過去現在未来にわたり、永遠に自由でなければならぬ——今風に表現すれば、これが秀吉の信念だった。

実際、古代律令制下の奴婢の制度は、九世紀、十世紀の平安時代中期には完全に廃止されたし、

その後、百姓は年貢さえ納めればどこへ移り住むのも自由だった。御成敗式目（第四十二条）はそれを保障している。百姓から移動の自由を奪ったのは、後世の徳川家康である（それでも奴婢の制度が復活したわけではない。日本人は徹底して奴隷制度を嫌ったのである）。

自由な日本人を奴隷として外国へ売り飛ばすバテレンは、自由の敵、日本の敵である。追放するほかはない。——秀吉は日本の完全な統一を目前にした天正十五年、天下人としての英断を下したのだった。

ちなみに、日本人が「自由」の概念を知ったのは、libertyやfreedomとていう英語の概念を知った明治以降だと主張する無知な学者もいたが、謬説である。「自由」の語はすでに『日本書紀』にみえており、使用歴は長い。秀吉の安土桃山時代には現代とまったく同じ意味内容になっていた。同時代の『日葡辞書』には、日本語の「自由」に対してポルトガル語の「liberdade」（英語のlibertyに相当）が挙げられている。この辞書を作ったのは当時の日本イエズス会だった。

豊臣秀吉が博多の陣屋にイエズス会の宣教師を呼び、ポルトガル人の人身売買行為について批判すると、宣教師はかねて用意していたかのよう

に、すらすらと日本語で答えた。

「閔白殿下、日本の殿様方（大名たち）がおやりになっていることで私どもを責めるのは、筋違いではござりませぬか？」

奴隷売買は日本の大名らがやっていることだ、というのだ。なるほど売買だから、買い手もいれば売り手もいる。大名らが売り手となって日本人をポルトガル商人に売り渡し、金儲けをしている、と宣教師は暗に非難しているわけである。言葉は丁寧でも、ただの開き直りでしかない。

秀吉はつい先月他界した大村純忠の蒼白い顔を思い浮かべた。日本初のキリシタン大名であり、バテレンの力と秀吉の軍事力を上手に利用してきた男である。

純忠も最初は鉄砲用の火薬ほしさにキリシタンとなり、火薬のため人身売買にも手を染めたというが、やがて完全に洗脳され、バテレン坊主の言うがままになってしまった。秀吉は素破（忍者）からの報告で実情をほぼ把握していた。

「あの忠誠心の高かった純忠でさえも、しまいにはバテレンの言いなりになる。バテレン追放はやむを得まい」

素破からは別の吉報も届いていた。ヨーロッパには南蛮人に対抗する紅毛人（オランダ・イギリ

ス・フランス人)もいて、そちらからも火薬は調達できる、というのだ。これがバテレン追放令を後押しした。

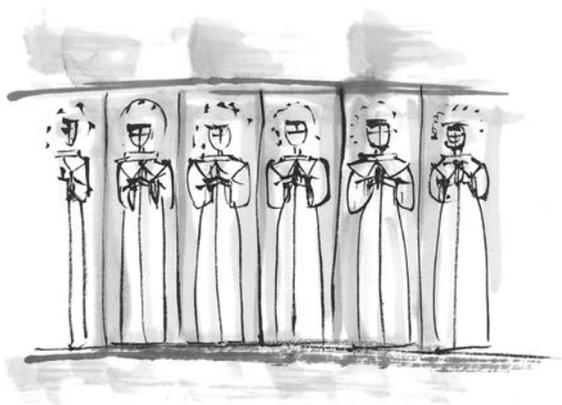
バテレン追放令の命令書を宣教師にもたせ、秀吉は右手をバツと耳のあたりで広げてみせた。

「責任者のコエリヨに伝えよ。日本にはいま五十万丁の鉄砲と一年分の火薬がある。南蛮との戦を露ほども恐れてはおらぬ、とな」

右手を広げたのは五十万丁を誇示したつもりだったのだろうが、宣教師には、どうみても六十万丁に見えた。

(了)

【この物語は歴史的事実に基づいたフィクションです】



(表紙説明)

■香川の手袋

手袋づくりに無くてはならない手袋の金型。精密でシャープな金型をつくることで、より心地よく美しい手袋が出来上がる。ここにも手袋史の変遷を見ることが出来る。

日本手袋工業組合

所在地／うどん県てぶくろ市湊一八一〇一

TEL／〇八七九一二五三二〇八

FAX／〇八七九一二四一〇八三八

撮影協力／株式会社トモクニ

「酒林」随筆特集 第八十九号

平成二十七年一月一日発行

発行人 西野信也

印刷所 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

- 〔本店〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔高松本社〕
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8 ☎087-835-4133
- 〔高松支店〕
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
- 〔丸亀支店〕
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
- 〔徳島支店〕
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
- 〔松山支店〕
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
- 〔岡山支店〕
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
- 〔洲本支店〕
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
- 〔大阪営業所〕
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14 ☎06-6877-2671
- 〔東京営業所〕
〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12 ☎03-3686-4133
- 〔観音寺物流センター〕
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稲1071-1 ☎0875-56-3133
- 〔多度津工場〕
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
- 〔琴平工場〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔金陵の郷〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

- 〔大阪本社〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
- 〔大阪支店〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
- 〔東京支店〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
- 〔名古屋支店〕
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
- 〔北陸営業所〕
〒918-8231 福井県福井市問屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967
- 〔上海西野貿易有限公司〕
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548
- 〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO.,LTD.〕
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng
klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

- Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend.
Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA ☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社
四国・琴平